

「しあわせ」って、そのさなかにいる時には感じないという特徴を持っている、と私は思う。

その時私は、古びて黄色く色変わりした畳の上にちょこんと畏（かしこ）まって座っていた。大好きな担任の先生にこっぴどく叱られていた。団先生は数学の先生で、ご自宅では和服だった。ほぼ0点に近い私の答案用紙が、床の間のある温かくて貧しげな座敷の真ん中にそよそよと居心地悪く揺れていた。中学2年の時だった。

「君は傲慢なんだ。アタマはすこぶるいい。どの科目も申し分ない。だから、苦手な数学なんてやらなくてもいいと思っていないか？こんな問題君にできないはずがない。やろうとしない君は高をくくってはいないか。三角形の底辺を君は計算もせず、定規で測って答えを出した。立派な根性だ」

憤っているはずなのに、じゅんじゅんと諭すような声に私の唇は泣きべそ色に曲がっていったに違いない。

「お茶でもあがってください」

その時先生の御母堂が湯気の立つお茶にお菓子まで添えてそっと畳の上に置き、やさしい笑顔でかすかな衣擦れの音を立てながら消えていった。

団先生はひょろりと背が高く、少し長い顔にぼさぼさの髪の毛がかかり、時々それをうるさそうに搔き上げる。美男でもないし、特別目立ったところはないのに、全校生徒のあこがれだった。

佇まいに清々しい爽やかさをにじませる二十代後半だったと思う。

クラス委員までしている私の答案用紙を見て、返してくれる時に教壇机の向こうから、私を掬（すく）い上げるように見て睨んだ。

「今度の日曜日、僕の家に来てくれないか」

先生のお説教は三十分ほど続いた。

「お菓子を食べろよ、お袋がせっかく持って来たんだ」

私は声も出せず、お茶を飲むこともできなかった。すごすごと帰る私を玄関の外まで見送ってくれた先生が苦しげに咳き込んだ。思わず振り返った私が見たのは、和服に懐手をした先生のやさしい笑顔だった。

「根性を通せ。君には沢山の才能がある。好きなことをやれ。人生は短いんだ。苦手なものはやらなくていい」

「えっ」

この日、私が出した初めての声だった。先生は微笑んだまま斜めになった夕陽を背負って立っていた。その姿が私をしあわせにしてくれた。女優になった私が先生にお礼を言いたいと思った時、先生はもうこの世にはいなかった。

「人生短いんだ。好きなことをやれ」と言った先生は、あまりにも若く旅立ってしまったのだった。

JAFに入っている方はご存じだろうか。この文章は、毎月出される「JAF Mate」に載っていたものである。有名な女優であり作家でもある岸恵子さんの文章である。「トランヴェール」に限らず、ふと手にする雑誌に、いいエッセーが載っていたりする。憧れる文章である。